

琵琶歌 「石垣原」

別府中学校初代校長 兼子鎮雄

この琵琶歌「石垣原」は、旧制別府中学校の学校報「鶴嶺」に収録された論稿で、別府中学校兼子鎮雄初代校長の作詩になるものと思われます。退職後は別府に住され、戦後の一時期には、別府史談会の会長を務められていました。ご鑑賞下さい。

此に吉弘嘉兵衛統幸は 主君大友義統が 朝鮮の陣に太閤の怒りにふれて国除かれ 周防に幽閉せられしかば 機を見て 主家を興さんと 飄然去つて柳河に 時期の至るを待ちにけり 天下分け目の関ヶ原 風雲急を告げければ 時至れりと統幸は 東をさして上りけり あゝ天なるか命なるか 義統すでに三成に 西軍参加を約したり 統幸至誠を披瀝して 事の非なるを諄々と 涙と共に説きたりしも 諫の言葉容れられず 更に再びまた三度 所信を述べて論ぜしも 遂に其の効なかりけり さはさりながら滅亡と 今眼の前に見ん

君を捨て去ることは統幸の 忠義の心に忍び得じ いざ一身を擲ちて 譜代の恩顧に報いんと 心を決して義統も 豊後にこそは下りけり

諫言不聴泣従軍。

諫言聴かず泣いて従軍す

忽擲一身收戰雲。

たちまち一身を擲つて戦雲收む

千古智謀忠節範。

せんこの知謀忠節の範たり

後人景慕祀孤墳。

後人景を慕いて孤墳に祀る

慶長五年秋の頃 大友黒田の両軍は 雌雄を一挙に決せんと 石垣原に対陣す 統幸心に期するあり これ今生の思出と 宗像田原諸将を招き 月見の宴を開きたり 夜気爽涼と月澄めど 殺気草原に充満し 草葉にすだく虫の音も 空を流るる星影も 悲愁陣営をとざしたり 統幸やをら詠ずらく 明日は誰が草の屍や照すらん

石垣原の今日の月かげ

明くれば九月十三日 君の御前にまかり出て さて此の度の戦は 味方一旦の利あらんも 最後の勝利覚束なし 今戦場に向ひなば 再び拝顔かなふまじ これやこの世の名残ぞと 暇申して九百餘騎 金鼓の響き堂々と 敵陣さして進みけり

一戦 死を決して 主恩に報ゆ

石垣 原上殺声起こる

波に落ち雲を突き 百里に聞こゆ

南土唯期す 忠節を尽くすを

黒田方の第一陣 きほひかゝれば統幸は もろくも退くと見
せかけて 境河畔に踏み止まり 討ちにうちてぞ追ひ返す

二陣を率ゐる久野治左衛門 頼み甲斐なき味方哉 者共つゝ
けと七百騎 真一文字に襲ひ来る 宗像鎮繼之を見て 五百

餘騎にて進撃す 剣光きらめき鮮血 迸り 両軍入り乱れて
奮戦す 宗像久野に討たれしも 久野も終に討たれたり 松

井有吉之を見て 黒田勢をば救はんと 大友勢に向ひしも
もろくも敗れ引退く 今は近づく敵もなし 統幸隊を整へて

暫し芝生に息をつぐ 黒田方の主将井上九郎衛門之房は 加
来殿山に陣せしが 時こそ今と令すらく 敵は討死と覚悟せ

り しかのみならず老巧の つはものなれば心せよ 馬を下
りて懸命に 力の限り戦へど 精銳すぐつて二千餘騎 一度

にドツと討つて出づ 統幸もとより決死の覚悟 朱柄の大槍
打ふりて 縦横無尽に突き伏せて 勢阿修羅の如くなり 之

房之を打ながめ 味方の大事と駆け向ひ 十文字槍引しごき
勢鋭く迫り来る 統幸静かに言葉をかけ 井上殿か珍らしや

いざ御相手と名乗りつゝ、互に馬を乗り回し 火花を散して
奮戦す あゝ昨日までは刎頸の友 今日には両軍の主将として
軍の場に敵味方 槍交ふるも戦国の 武門のならひ是非もな
し 統幸無双の勇あれど 朝来よりの戦に 九ヶ所の痛手身
に負ひて 三十八を一期とし 討死せしこそ痛ましけれ

孤運落つる石垣原や枯れ尾花

主将斃れて支へ得ず 義統終に降りけり 能直以来四百年

栄え来たりし大友の 武運の末ぞ哀れなり さはさりながら
人は武士 花は桜木清き名を 代から代に語り伝へて下馬の

松 松の縁と諸共に 千代萬代に芳ばしく 忠勇義烈統幸の
名は千代に伝はりて 武士の鏡よ軍神と 仰がぬものこそな

かりけれ 仰がぬものこそなかりけれ

読み下し文につきましては、淡窓伝光靈流日本詩道会
総本部「詩心」編集部部長前田弘靈先生のご指導を仰
ぎました。厚くお礼申し上げます。